

ローマ、ビジョンを確立する - ナンバー・セブンティーン

十四万四千人の最終的なふるい分け：獣の像に関する預言的な試練

Jeff Pippenger

2024-09-24

十四万四千人の一人となるように召された者たちは、今や最終的なふるい分けの過程にあり、その過程は獣の像の形成に基づく試練である。この試練の過程は神の家から始まる。裁きは常に神の家から始まるからであり、その後、神の他の羊の群れも同じ試練の過程に直面する。獣の像の形成に関する預言的特徴のうち、最も重要で意味深いものは、おそらくそれが二度起こるという点である。まず米国で、次に世界の他の地域で起こる。これは預言的には、世界における獣の像が獣の像の最終的な顕現であることを意味しており、したがって、世界における獣の像に先行して現れた獣の像のいかなる型も、実体を表す影にすぎなかった。

2001年9月11日、神の家において裁きが始まった。その日は、『黙示録』10章の天使が手に開かれた小さな書を携えて下ってきた1840年8月11日に予表されていた。10章の天使が下ってきたとき、当時すでにプロテスタントに対する裁きが進行中であることを告げた。神は誰を裁くにしても、まず前もって警告する。そして、時期を定めるためのミラーの方法論が確認されたことは、再臨の裁きに関する彼の計算にさらに重みを与えた。プロテスタントに対する試しは1840年8月11日の時点で始まっており、1844年までにはプロテスタントはローマの娘たちとなっていた。1840年から1844年までの期間は、2001年9月11日から間もなく到来する日曜法に至る期間を予表している。

それら二つの期間は、聖霊が下られたイエスの洗礼から十字架に至るまでの間にも表されていた。それら三つの期間は、洪水前の世に与えられた、洪水に至るまでの百二十年によって、すべて予表されていた。その特定の歴史の裁きを明らかにする警告のメッセージが、常にある。終わりの時代のこの特定の期間をも扱う聖なる歴史がある。

ノアは百二十年のあいだ宣べ伝え、その後、洪水の裁きが到来した。キリストは千二百六十日のあいだ宣べ伝え、その後、十字架の裁きが来た。バプテスマのヨハネの警告のメッセージはキリストの洗礼において力を与えられ、その後イエスは四十日のあいだ荒野へ導かれた。その四十日と、四十日の終わりに起こった三つの試みは、ひとたびメッセージが力を与えられると、すなわち、彼の洗礼のときの聖霊の降臨のような聖なる象徴の降臨、ならびに黙示録第十章と第十八章に現れる二人の天使の降臨によってそれが示されるとき、試みの過程が進行していることを教えている。神の象徴が下ってくるとき、当時裁きの対象とされている者たちに宣べ伝えられる裁きのメッセージは力を与えられ、裁かれているその特定の群れは、彼らの猶予期間の終結によってのみ終わる特別な期間に入るのである。

イエスの年表は、証しの二つの期間を示している。最初は、一千二百六十日にわたるイエスご自身の個人的な証しであり、その後は、ステパノが石打ちにされるまでのさらに一

千二百六十日の間、弟子たちの前でのイエスの証しであった。

すると天使は言った。「彼は一週〔七年〕のあいだ、多くの者と契約を確かなものとする。」救い主がその宣教を始めてからの七年間、福音はとくにユダヤ人に宣べ伝えられることになっていた。最初の三年半はキリストご自身によって、その後は使徒たちによって。「その週の半ばに、彼はいけにえと供え物をやめさせる。」ダニエル書9:27。紀元31年の春、まことのいけにえであるキリストがカルバリーでささげられた。そのとき、神殿の垂れ幕が真っ二つに裂け、いけにえの儀式の神聖さと意義が失われたことが示された。地上のいけにえと供え物が終わるべき時が来たのである。

その一週（七年）は西暦34年に終わった。そして、ステパノの石打ちにより、ユダヤ人はついに福音の拒絶を決定的なものとした。迫害によって各地に散らされた弟子たちは、「至る所でみことばを宣べ伝えた」（使徒8:4）。そして間もなく、迫害者サウロが回心し、異邦人への使徒パウロとなった。『時代の望み』、233。

ノア、キリスト、ミラー派、そして十四万四千人の系譜は皆、特定の対象者が警告のメッセージによって試みられる期間があることを証ししている。メッセージに力が与えられることが試みの期間の始まりを示し、その期間はやがてその対象者の恩恵期間の終わりによって締めくくられる。イエスの預言的系譜では、二つの証しの期間が特定されている。これら二つの証しの期間は、2001年9月11日に降臨して黙示録18章1～3節を成就した天使によって表される警告メッセージと、その後続く18章4節以降の第二の声によって表される警告メッセージという、二つの警告メッセージを象徴している。

このように、世界への警告のための最後の働きにおいて、諸教会に二つの明確な呼びかけがなされる。第二の天使のメッセージは、「バビロンは倒れた、倒れた、その大いなる都は。彼女はその淫行による怒りのぶどう酒をもって、すべての国々に飲ませたからである。」そして第三の天使のメッセージの大いなる叫びにおいて、天から「わたしの民よ、彼女から出て来なさい」という声が聞こえる。Review and Herald、1892年12月6日。

第一の期間は神の家から始まる裁きであり、その後、間もなく到来する日曜法の時に、バビロンから出よという警告とともに第二の裁きの期間が始まる。キリストの洗礼から十字架に至る歩みは、2001年9月11日からアメリカ合衆国における日曜法までを表している。また、アメリカ合衆国における日曜法から、すべての国が日曜日を礼拝の世界的な日として受け入れることを強いられる時点に至るまでの期間は、最後の一国が従うときに終結する。

その期間は、米国における日曜法から始まり、最後の国が教皇権に屈服するときに終わる。第二の期間の始まりは第一の期間の終わりを画し、両者には、ローマの証言においてあらかじめ型示されている日曜法が伴う。321年の最初の日曜法は、異教ローマの権威によってもたらされた。教皇教会の権威によってもたらされた日曜法は、538年によって表される。米国における日曜法は321年によって、最後の国に強制される日曜法は538年によって表される。米国における日曜法は、その後イスラエルの追いやられた者たちから成る旗印によって宣べ伝えられる警告のメッセージの到来を告げる。

その道標は西暦321年であり、それは日曜問題に関してすべての国々が試みられる期間の始まりを示している。その期間は最後の国がローマに屈する時に終わり、その出来事は西暦538年の道標によって予表されていた。321年から538年までの期間は、十字架からステパノが石打ちにされるまでの期間によって予表されていた。ステパノが石打ちにされつつあったとき、彼は天の聖所に立っておられるキリストを見たが、それは人類の猶予期間の終わりにミカエルが立ち上がる時を予表している。

2001年9月11日は、第十八章の最初の三節にある警告の到来を告げる日となり、また、女預言者エレン・ホワイトが示した予言によって印づけられた。彼女は、ニューヨーク市の巨大な建物が神の手のひと触れで倒されるとき、まさにその三節が成就するだろうと語った。また、それは愛国者法によっても示された。見ようとする者にとって、それは〈有罪が立証されるまで無罪〉とする英法の原則が退けられ、〈無罪が立証されるまで有罪〉とするローマ法へと置き換えられたことのしるしであった。

米国愛国者法は、ラオデキア的なセブンスデー・アドベンティズムに対する裁きの始まりとなった。その期間は、米国における日曜法で終結する。そのふり分けの期間を乗り越えたラオデキア的なセブンスデー・アドベンチストたちは、その後、第十八章四節の警告のメッセージを告げることになり、それはローマにひれ伏す最後の国で終わる。この期間は、米国における日曜法から始まり、最終の日曜法で終わる。

もし、二人以上の証人の証言によって特定されている獣の像が二つあるという事実を誤解するならば、私たちは、2001年に始まった黙示録18章の最初の三節に示されている働きと、同章4節で始まる働きを誤解することになるでしょう。

私たちが、ホワイト姉妹が1888年の出来事として黙示録18章の天使の降臨を明確に特定し、同じ天使を将来の出来事としても位置づけていることを踏まえると、1888年は2001年の予型であるとわかる。地をその栄光によって照らす黙示録18章の天使は、1888年のミネアポリスの会合のときに降りて来たが、ニューヨーク市の巨大な建物が崩れ落ちたときにも再び降りて来た。

キリストの洗礼から十字架に至る期間、1840年8月11日から1844年10月22日までの期間、そしてノアの百二十年の期間は、審判の期間を指し示す三つの証しとなる。1888年は、ミネアポリスの会合で記録された反逆の顕現の証しとなり、またノアは、そのメッセージを拒んだ者たちから聖霊が取り去られることを示している。洪水前の人々の反逆も、1888年の教会指導者たちの反逆も、モーセの時代に起きたコラ、ダタン、アブラムの歴史と一致しており、それは天使がホワイト夫人に、ミネアポリスで繰り返されていると告げたものである。

米国の愛国者法から「日曜法」に至るまでの期間は、ラオデキア的なセブンスデー・アドベンチズムにとっての試練の時を表している。彼らの審判を告げる警告のメッセージに対する反逆は、聖霊が取り去られたことを示し、ゆえにその時代の悪しき愚かな乙女たちの上に「強い惑わし」が注ぎ出されることを意味する。反逆の標的は、ノア、モーセ、ジョーンズ長老とワグナー長老、そしてもちろんホワイト夫人によって代表される、選ばれた使者である。警告のメッセージとその歴史の使者に対する反逆は、十人の乙女のたとえの歴史における「油」に基づいている。

警告のメッセージを示す人々がそうするのは、彼らが「油」を持っているからであり、その「油」とはすなわち警告のメッセージでもある。したがって、その二つの階級の差異は、第一と第二の天使の運動に属する者たちが採用し、ミラーの解釈規則として表される預言解釈の規則、ならびに第三の天使の運動が採用した預言解釈の規則を正しく適用することによって生み出される。

「獣の像の形成」として表されている試練は、したがって、神の預言のことばにおいて獣の像がどのように形成されるかに関わるものでなければならない。

2001年の愛国者法は1888年のブレア法案によって予表され、ブレア法案は1776年の独立宣言によって予表され、独立宣言はキリストの洗礼によって予表され、そしてその洗礼は1840年8月11日を予表していた。これらは皆、審判における試しの過程は、天使の手から取って食べなければならない力を帯びた警告のメッセージから始まるという真理を裏づけている。

アメリカ合衆国を「あなたの民の略奪者」とする預言的教えは、その論理によっていくつかの点を混同しており、しかもそれらの点は、獣の像の形成の諸要素を確立するうえで最も直接的な根拠聖句であることが多い。この検証が本質的に預言的性質をもつという事実を示す一つの方法は、「あなたの民の略奪者」によって表されている象徴がローマを指すと受け入れる場合にのみ理解される真理を、預言の基本則を用いて立証することである。

この図は、アドベンチズム内部における五つの歴史の流れに基づいており、そこでは象徴としてのローマをめぐる論争が起こった。私たちは今、これらの論争の歴史の最後、すなわち第六の段階にあり、現在の論争は1843年の図表に示された論争と同一である。

預言の原則を正しく適用すれば、この真理は容易に見て取れる。用いるべき預言の原則の一つは、象徴には複数の意味があり、ある箇所ではそれらが用いられる意味はその箇所の文脈によって確立される、ということである。シリアの王アンティオコス3世（大王）は、ダニエル書11章10節の戦いを成就し、11節と12節のラフィアの戦いをも成就し、15節のパニウムの戦いも成就した。1843年の図表に示されたミラー派の論争点は、誤ったプロテスタントの見解が「略奪者」をアンティオコス・エピファネスだと特定したのに対し、「略奪者」はローマの象徴であるという真理を擁護したことであった。

10節から15節は、アンティオコス3世マグヌスの歴史において最初に成就した。したがって、これらの節と、その後の歴史におけるこれらの節の再現とは、終わりの日におけるこれらの節の成就を裏づける二つの証しとなっている。というのも、すべての預言者は、自分たちの生きた時代よりも、終わりの日についてのほうを、より直接的に語ったからである。

預言者の証言をどこに適用すべきかに関するその確立された原則に加えて、ホワイト姉妹は「この予言〔ダニエル書第十一章〕の成就において起こった歴史の多くは、繰り返される」と直接記録している。アンティオコス3世マグヌスは、教皇ローマの代理軍としてのアメリカ合衆国を象徴している。プロテスタントは、その「略奪者」が別のアンティオコスを予表していたと主張したが、ミラー派はそれがローマであることを知っていた。

現在、一方はアメリカ合衆国をその「略奪者」と見なしており、他方はその根本的真理を堅持している。

象徴は複数の意味を持ち、その意味はそれが用いられる文脈に基づいて決まるという規則を適用するなら、アメリカ合衆国を「略奪者」と見なすことは、プロテスタントがアンティオコスを「略奪者」と見なしたことに対応するが、今やアンティオコスは終末時代におけるアメリカ合衆国の象徴である。

この箇所の文脈は、幻を成就させるために自らを高ぶらせるのはどの権力かという問いに直接取り組んでいる。したがって、この事実重点を置くのは妥当である。それは多くの証言によって支持される。というのも、象徴としてのローマをめぐる論争の他の歴史的な流れも、同じ事実を指し示しているからである。その事実とは、この問題で誤った側に立つ者たちは、決まってローマの位置にアメリカ合衆国を据えるということである。しかし、象徴には複数の意味があり得ることを受け入れる気がないなら、あるいはそう信じてはいても、その原則に十分に習熟しておらず全面的に信頼できないなら、これから適用される論理を追うことは事実上不可能だろう。

あらゆる二本の角を持つ権力は、終末の時代におけるアメリカ合衆国を表している。フランスは、ソドムとエジプトに象徴される二重の権力である。イスラムもまたアメリカ合衆国を象徴している。というのも、アメリカ合衆国は、イゼベルに当たる教皇権に対して偽預言者であるからだ。アメリカ合衆国は、ヘロディアに従属するサロメである。バラムもまた偽預言者の象徴だが、彼の物語は単なる偽預言者という以上に複雑である。

彼がイスラエルを三度祝福した後に記録されたバラムの預言は、さまざまな形でイスラム教と結び付けられている。ロバはイスラム教の象徴であり、バラムの物語から話すロバを外すことはできない。幼子イエスを礼拝しに来た東方の博士たちは、バラムの預言に導かれた。黙示録第9章の三つの災いにおけるイスラム教は、偽預言者ムハンマドを表している。

象徴には複数の意味があると理解しているなら、多くの真理が、さまざまな象徴で表されるほど重要であることも、疑いなく理解できるだろう。幻を確立する象徴はローマの象徴であり、したがってローマが聖書の預言全体を通じて主要な主題となるのは明らかである。ローマの古典的で定着した象徴の一つは、ダニエル書11章の北の王である。助ける者もなくその終わりに至る北の王とは、教皇権、ローマ教会、ローマの教皇、すなわち不法の人のことである。

ユライア・スミスをめぐる論争において、36節の「北の王」はフランスであり、40節の「北の王」はトルコであると主張された。フランスもトルコも、異なる文脈ではアメリカ合衆国の象徴である。しかし、プロテスタントの場合と同様に、そして今日でも同様に、スミスの論争では、スミスは「北の王」が近代ローマの象徴であるという真理を退け、ローマの象徴はフランスという国におけるアメリカ合衆国の象徴によって表されていると主張し、さらにローマの象徴はトルコという国において表現されたアメリカ合衆国の象徴であるとも主張した。

文脈には現在、三つの流れが含まれている。ミラー派の歴史、ユライア・スミスの歴史、そして現在である。それらのそれぞれにおいて、ローマの象徴をめぐる論争があり、ローマをアメリカ合衆国の象徴と誤解することによって、その象徴が誤って適用されている。

ダニエル書における“the daily”をめぐる論争の流れは、ローマの象徴に関する真理に反対して論じるという、まさに同じ強調を堅持しているが、この歴史にはいくつか重要なニュアンスもある。

ユライア・スミスの預言モデルの論理は、彼の信奉者たちに、黙示録16章の第六の災いを誤って適用させた。すべてを霊的に適用すべき時期にすべてを文字どおりに適用しようとしたことは別として、スミスの16章の適用における主要な問題は、竜と獣と偽預言者から成る三者連合の具体的構造を見抜けなかったことであった。象徴の真の意味を私的解釈の意味に置き換えたために、スミスの論理は、三者連合がどのように形成されるのかを認識する能力を封じてしまい、しかもその形成のされ方こそが「神の民の永遠の救いがそれによって決定される大いなる試練」なのである。

ローマの象徴の誤用は、サタンが、終末時代の神の民が現代のローマそのものだけでなく、現代のローマがどのように形成されているのかを見ることを妨げるために行う試みである。国際連合、教皇権、そしてアメリカ合衆国の結合に関連する預言的特徴を認識する必要性は、永遠に関わる結果を伴っている。

ダニエル書には、これら三つの権力の関係を認識することの重要性を強調する特別な試験があり、同じ点を強調するもう一つの特別な試験がヨハネの黙示録にもある。ダニエル書の「日ごとのもの」は、ウィリアム・ミラーがテサロニケ人への第二の手紙を研究する中で、異教ローマを指すと理解した。ミラーは、テサロニケ人への第二の手紙における異教ローマと教皇ローマの預言的關係の記述から、「日ごとのもの」という語は異教ローマの象徴であり、したがって荒らす憎むべきものは教皇ローマであると理解した。

私たちが強調しているのは、テサロニケ人への手紙第二において、異教ローマと教皇ローマの關係が、もしその二つの権力の關係を理解しないなら強い惑わしを受け、永遠に滅びると教える文脈の中に置かれているという点です。

これは第六の災いに関する同じ警告であり、テサロニケ人への手紙第二では竜は異教ローマ、獣はその箇所「不法の人」とされているだけでなく、16章には偽預言者も登場する。この箇所は、現代ローマの三者連合、すなわち現代のバビロンを構成する諸勢力の關係を認識することの重要性を強調している。

“the daily”をめぐる論争は、まさに同じ終末の論争を扱っているが、現代のローマを構成する三つの権力の關係を理解することの重要性を付け加えることで、その論争が何を指すのかの同定を拡げている。この真理を見ることを拒むのは、その報いとして強い惑わしを自らに確実にもたらすことである。

現在の論争において、米国を略奪者と見なす人々は、米国が教皇権そのものではなく、むしろ教皇権に従属しているものとして繰り返し描かれているということの重要性を認めることすらできないように見える。基本的な常識として、政治、歴史、結婚、そして聖書の預言において、關係を支配している側の力が頭と見なされ、その頭こそが自らを高

ぶらせて幻を打ち立て、そして倒れる。

アメリカ合衆国を「強盗」と特定する論理は、321年から538年にかけて示され、その後成就した歴史を当てはめることができない。アメリカ合衆国の象徴は、「罪の人」が現れる前に退けられなければならない。「罪の人」は終わりの日に再び現れるが、その前にまずアメリカ合衆国が退けられなければならない。

アメリカ合衆国における日曜法は、アメリカ合衆国を「現代ローマ」と特定するものではなく、国家的破滅が到来し、アメリカ合衆国が義と完全に断絶してしまったことを示している。アメリカ合衆国が日曜法において背教に陥るときに明らかになる「現代ローマ」とは教皇権であり、その教皇権はまさにその時その場で、自らの盟友である偽預言者を征服したのである。

ダニエル書における「常のささげ物」とウィリアム・ミラーのメッセージとの関係、ミラーの理解がテサロニケ人への第二の手紙2章から導かれていることの意義、そして第六の災いにおいて衣服を保つようにとの警告は、いずれも、そうした論争から、現在の問題に対処する要素を指し示している。

終末における第二テサロニケ2章の警告は、アメリカ合衆国を象徴と見なす一派について述べているが、彼らはアメリカ合衆国と教皇ローマとの関係を取り上げる光に導かれることを拒む。こうすることで彼らは、教皇ローマとアメリカ合衆国との関係だけでなく、黙示録16章に登場する竜の勢力である国際連合との関係も見ることになる。

ホワイト姉妹が原因から結果へと推論できないと指摘したユーライア・スミス、A・G・ダニエルズ、W・W・プレスコットと同様に、神の預言の言葉が終わりの時代におけるこれら三つの勢力の関係を解き明かす際に示す導きに従うことを拒む者たちもまた、原因から結果へと推論することができない。

最初の論争、現在の論争、そしてユライア・スミス論争と同様に、テサロニケ人への手紙第二と第六の災いにおいて表されている三つの勢力の関係をめぐる論争は、アメリカ合衆国を指し示す私的解釈を示しているが、彼らの誤った概念を暴き、場合によっては彼らを光へと導きうる、アメリカ合衆国のある予言的特質を見ることを拒んでいる。

2001年9月11日以後、ヨエル書の四つの虫をめぐる論争が巻き起こった。実のところ、その虫は、カトリックおよび背教的なプロテスタント神学の導入によって引き起こされた、ラオデキア的なセブンスデー・アドベンチスト教会の漸進的な霊的退廃を表していた。あらためて言えば、四つの虫の正しい適用はローマである。しかし、私的解釈はそれをイスラムだと主張し、イスラムは偽預言者の象徴であり、ゆえにアメリカ合衆国の象徴だとした。行に行を重ねて見ていくと、いま扱ったアドベンチストの歴史における諸論争は、いずれも同じ真理を物語っている。

誤った側は、四人の証人に基づいて、強盗の正体をアメリカ合衆国だと特定しており、また二人の証人に基づけば、アメリカ合衆国という象徴に対するその理解は誤っている。神の終わりの日において十四万四千人の一員となる候補者たちは、今、預言的な試験の中にある。それは、どちらの側に投票するかを単に選ぶだけで済むような試験ではない。それは、預言の規則を正確に適用してはじめて、真に正しく通過できる試験である。ユダ

族の獅子は、終わりの日の民に、彼らが十分に深く学んでいないという事実を目を覚まさせるために、異端が持ち込まれるのをお許しになった。

この運動の内部に異端が生じたという事実は、預言解釈の規則に関する私たち個々の能力が、本来あるべきほどに強くないことを示している。幻を立てるのはローマであり、終わりの時代の幻とは「北の王」の最終的な興隆と没落である。その「王」はまた「不法の人」であり、この「不法の人」は「不法の秘密」、そして「あの『不法の者』」でもある。彼は反キリストであり、彼は「あなたの民の暴虐な者たち」として象徴され、さらに現代ローマの「頭」でもある。

言葉の理解に混乱し、反キリストの意味を見ることができない者は、必ずや自らを反キリストの側に置くことになる。今や、私たちが世と同化する余裕はない。ダニエルは自分の分と自分の場所に立っている。ダニエルとヨハネの預言は理解されるべきである。両者は互いに解き明かし合う。これらは、誰もが理解すべき真理を世界に与える。これらの預言は世において証しとなるべきものである。終わりのこの時代にそれらが成就することによって、それら自体が自らを説明することになる。クレス・コレクション、105。